

トマスの認識論に於ける個別者の問題

中山 浩 二 郎

一般にトマスの認識論は普遍者 *universalia* の認識に終始するとされている。

ところで、外的世界に於けるすべての現実的存在は、個別的なものであり、特殊的なものである。われわれは個々の何らかの「もの」を感覚するのであって、「ものと云うもの」を感覚するのではない。存在を思惟に於て見出すデカルト流の観念論者は知らず、存在に於て思惟を見出したトマスが、個別者 *singularia* の理性的認識を等閑視し、単に質料的原因としての位置にとどめたのみであったとは考えられないのである。

凡そ、トマスの認識論によれば、人間の理性的認識は、感覚に与えられる外的事物の形相 *species sensibilis* の印刻と、それに対して働く能動理性 *intellectus agens* によつての存在の可知的形相 *species intelligibilis* の抽象、現実態 *actus* としての可知的形相の可能理性 *intellectus possibilis* に於ける形相的実現による存在の本質要素概念の把握、判断に於けるかかる概念の分離結合による存在の複合概念の構成、そして最後に、かかる概念の客観性の検証と云う五段階を経て達成せられるのであるが、かかる過程に於て、感覚によって受容せられた事物に内含せられるところのもの *species sensibilis* を、普遍的にして可知的なもの *species intelligibilis* とする能動理性の働きが介在することから、恰もトマスの認識論は、普遍者のみを認識することに終始するかの如く考えられるのである。

然しながら、われわれの認識対象に対する知的把握が深まれば深まる

程、われわれは対象をその個別的、具体的实在性に於て認識する。人間的認識の完成は、本来、現実实在する事物を知ることではなければならないからである。われわれが切に知りたいのはソクラテスその人であって、その本質概念としての人間一般ではない。それにも拘らず、たとえわれわれの理性が窮極的に实在を認識するようになるのは、实在との対応に於てある可感的形相によってであるとしても、そこには、能動理性が捨象して可知的形相を産出する質料的制約を包含している⁽¹⁾。即ち、可能理性にとって可知的対象となり得るものは、能動理性によって抽象せられた可知的形相のみであって、この意味で可感的形相は現実的に不可知のものであり⁽²⁾、従って又、質料に於て在る個別者が現実的に可知的であることもあり得ないのである。

認識に於て理性は、自ら把捉したところの形相を表示するものとして表象するのであるが、かかる形相 *species expressa* は能動理性によって抽象せられたものである限り、もはや直接に实在対象との接触はもっていない。そればかりでなく、具体的、可視的に対象を再現することもできないのである。かくて理性は实在する事物との連鎖を断ち切られたのであろうか。凡そ、表象としての *species expressa* は、記号に他ならない。一般に記号とは、他の或るものを表すために用いられるものであり、何らかの仕方で意味を伝達するところのものである。ところで、国旗が国家を象徴し、鋸が働く者を象徴するように、全く用具的な記号がある。かかる意味での記号は、恰も打ち下された鋸が、働く者の作用を伝えると云う仕方で意味を伝えるものであり、それは作用者に固有のものではなく、又或る種の表象でもなくして、全く外在的なそれ自身の実存をもつところのものである。之に反して、記号であることがその全本質であるところのもの、換言すれば、表象することがその本質であるような記号がある。それは意味を伝えるためにのみ存在し、認識能力に内属する性質としてのその客観的

実存は、或るものの客観的表象であると云うその役割に随伴するのである。

扱て、認識の働きに於て、理性によって産出せられた形相は、かかる形式的記号であって、用具的記号ではない。若し用具的なものであったら、理性は実在を認識することなく、何らかの象徴の認識を以て終ることとなるであろうが、かくては理性的認識の目的は遂に完成せしめられないこととなろう。

ところで、かかる記号としての可知的形相が、われわれの理性的認識の対象そのものであるのだろうか。凡そ、意識は外的対象が先ず把握せられた感覚的認識からの抽象の後に、それらの対象を再現せねばならぬが、その際、それによって対象が表象せられる非質料的な相似性 *similitudo* が即ち *species expressa* なのである。従って若し、われわれの認識するものが、意識内在的なかかる可知的形相のみであったとしたら、意識外に存在する事物を取り扱い得る学問は存在しないと云うことになるであろう。即ち、可知的形相は、たとえそれが可能理性にとって固有の可知的対象であるとしても、「それによって理性が認識するものとして理性に関係せられると云われねばならない」⁽³⁾し、又、「理性が自らを反省する時に第二次的に認識せられるものであり、第一次的に認識せられるものは、その形相が相似である事物そのもの」⁽⁴⁾に他ならないのである。かくて可知的形相及至概念は、それが一方では志向的及至非質料的に存在する形相であり、他方では質料的事物に具有せられ、質料的に存在する形相であると云うこと、約言すれば、その実存の仕方が異なっていると云うことを一応括弧づけさえすれば、形相そのものとしては実はわれわれの意識の外にある実在性そのものであるとさえ云い得るのである。

然らば、可知的形相がそこから抽出せられる、感覚に印刻された外的事物の形相 *species impressa* は、われわれの感覚的認識の本来の対象であるのだろうか。われわれが何かを見る時、可視的对象そのものを見るのであって、*species impressa* を見るのではない。このことは恰も認識が全て非

質料性に基づいて行われると云うことと矛盾するかのようである。即ち、形相はその物的実存の様式に於てではなく、志向の様式に於て認識者に存するからである。⁽⁵⁾ 然し、われわれが単なる写像 *imago* を見ているのであって、実在を見ているのではないと云ったとしても、われわれの感覚が実在と真に対応しているか否かの確証をもってはいない。寧ろ、われわれは現実にさまざまな写像を通して実在を見るのであり、この事実からして、可感的形相に物的在り方と志向的在り方との二つの実存様式を指定することができるであろう。これは恰も表裏同じ模様のある絨氈を両面から見る如きもので、現実に二つの局面は実は一つの同じものを意味しているのであって、物的形相と志向的可感的形相とは、その実存の仕方⁽⁶⁾に於てのみ異なり、形相としては実は同一のもと考え得るのである。即ち、可感的形相は感覺的認識の本来の対象ではなくして、外的対象の質料性とは異なった質料性に於て存在する外的対象の表象であり、対象に現存しているところのものを認識者に再び表象するところのものである。

かくて、明らかなことは、第一にわれわれの理性は実存する個別者に対して、感覺能力を通して或る種の連続的関聯をもち得ると云うことである。もとより理性が普遍的且つ必然的に可知的対象を認識するものであるかぎり、かかる関聯は器官的連続でもあり得ないし、認識の同一様式に於ける連続でもあり得ない。然しながらそれは、理性が意識の感覺能力に於てあるそれ自身の作用の起源へ還元すると云う仕方⁽⁶⁾で、認識作用としての意識に於て又意識を通じてある関聯なのである。第二にわれわれの認識の対象であるかの如き形相は、それが可感的なものであれ、可知的なものであれ、実はわれわれの認識の本来の対象、即ち、「認識せられるもの」 *id quod* ではなくして、それを媒介として、即ち「それによって……するところのもの」 *id quo* として単に方法的な対象であるにすぎないと云うことである。

扱て、可知的形相は、たとえそれが感覚に原因せられ、感覚に対応する個別の実在性から抽象せられたものであるにもせよ、その非質料性の故に普遍者としてのみ可認識的である[※]。従って個別者の認識は愈々困難の度を加えるのみである。然しそれ故にこそ、われわれは更に普遍者の実存する仕方について考察しなければならない。この問題に関する唯名論と実在論との対立は既に久しい。ところで、アリストテレスの学説に基き、中庸的実在論をとったのはトマスであった。

何故に実在論であるかと云えば、意識によって抽象せられた普遍的形相は、事物に於て実存するところの形相に対応すると考えられたからであり、又、何故に中庸であるかと云えば、形相の実存の普遍的様式が事物に於てではなく、唯意識に於てのみ存すると考えられたからである。何となれば、普遍者と云う名辞は、それが普遍者の概念を基礎づけるものとしての共通の本性を意味する場合と、それ自身に於て考察せられるものとしてとられ得る場合と二つの仕方であられるからである。例えば、普遍的概念によって表わされる「人間性」と云う本性にしても、それが自然的実在に於てある場合は個々の人間に固有のものとして質料的存在であるし、理性に於てある場合は非質料的存在となるであろう。従って、かかる本性が自然的質料に於て実存する場合は、それは質料によって個別化せられている故に、普遍的概念を附加し得ない。何となれば個別的質料からの抽象によってのみ普遍的概念は構成せられるからである。本来的に云って、「普遍概念は普遍的本性が理性に於て実存をもつ時にのみ述語せられ得るのである⁽⁷⁾」。

ここにトマスのこの問題についての結論を引用しよう。「普遍者がかかるものとして精神に於てのみ実存する。然し、それに普遍的概念が附加せられる本性そのものは事物に於て実存する⁽⁸⁾」。かくて、本性そのものを意味するところの共通の名辞（例えば人間）は個別者について述語し得るが、普遍的概念を意味するところの名辞（例えば人間を表す種概念そのもの）は

個別者について述語し得ないのである。

その自然的実在に関しては個別の状態に於てあり、それが精神に於てある場合は普遍の状態に於て考えられると云う形相の二重の実存性格によって、個別の実在性は、そこに理性の可能的、可知的、普遍的形相が基底的に実存しているところのものであり、かかる個別の実在性への感覚の分与によってある感覚的認識が、たとえ完全な意味ではないにしても、理性的認識の原因である⁽⁹⁾と云うことが、極めて重要な意味をもっているのを首肯し得るのである。

※ かかる普遍者が非質料的であると云っても、人間理性の本来の対象である質料的事物の形相である限り、全体形相 *forma totius* として、自然的事物の含む質料を包括していることは見落されてはならない。cf. Thomas Aquinas : *De ente et essentia*, caput, 3.

われわれの理性的認識は感覚的認識によって制約せられる。理性が認識の素材を抜き出すのは感覚的現象界からであるが故である。然しながら、さきの考察によって明らかなように、意識に直接把捉せられる形相は、それによって対象を感覚し、更に又、それによって対象を認識する方法的なものでしかない。かくて、われわれの理性認識の本来の対象は、感覚によって与えられるところの、質料に於て個別に存在する事物そのものであると云わなければならないであろう。然し、このことよりしてわれわれは、「理性は、質料的事物に於てある個別者を直接的且つ第一に認識することはできない。……却って……理性は、直接的には（事物から抽象せられた）普遍者のみを認識する⁽¹⁰⁾」と云う、トマスの認識論の基本的原理を如何に解したらよいのであろうか。

この問題を解決するため、先ず、能動理性によって抽象せられた普遍者としての可知的形相が、理性的認識の本来の対象ではなくして、方法的対象であることを可感的形相と關聯せしめつつ考究した。次に、かかる普遍者が一方志向的に普遍者として理性に存在し、他方実在的に個別的事物に

存在することを明らかにした。最後に普遍者によつての認識が何によつてその客観性、現実性を検証せられ得るかを明らかにしようと思う。

可知的形相によつての認識が第一にもの ⁽¹¹⁾ *res* を認識することにあるとするトマスが個別者の認識について如何に多大の関心と努力をはらつたかは次の引用によつても明らかである。

トマスは、如何にしてわれわれの理性が個別者と接触し得るかについて、「われわれの理性は表象との何らかの関聯によつて個別者を認識する」⁽¹²⁾ とか、「理性は、普遍的本性乃至本質を自らを拡張することによつて直接に認識する。然し理性は、可知的形相が抽象せられる感覺的表象へ還元する限りに於て、反省によつて個別者を認識する」⁽¹³⁾ とか、或は又、「われわれの理性は、直接には普遍者のみを認識する、然しながら間接的に、或る種の反省によつてのように、個別者を認識することができる」⁽¹⁴⁾ 等々種々難解な説明を試みているのである。

扱て、われわれは既に、理性がそれから可知的形相を抽象する質料的存在についての素材を集めるために、屢々感覺を使用することを知っている。ところで、この抽象せられた本質概念は如何にして検証せられ、実在に対する現実的認識は完成せられるのであろうか。この問題の解決には、人間理性の固有の対象と、人間的認識の固有の機能とを考察する必要があるであらう。

肉体と精神とから合成せられた人間の置かれている世界は、各々その固有の形相を有する質料的事物から合成されている宇宙であり、これら自然的事物を特殊化し個別化する原理は、各自然物の有する特定の質料 *materia signata* である。それ故、肉体的制約をとともなうわれわれの理性の固有の対象は、純粹精神のそれのように質料から全く離存した本性ではなくして、物的質料に於て存在する本性であることに注目しなければなら⁽¹⁵⁾ ない。かかる本性は個別者に於て在り、従つて個別的事物の本性は個別的に存在するものとして認識せられる以外、認識せられ得ないのである。

ところで、「認識の対象は、認識能力に比例的に存在する⁽¹⁶⁾」。即ち、物的器官の作用である感覚能力に対応する対象は、その規定によって個別者が存在する原理として物的事物に実存する形相である。従って、感覚能力の認識するところのものは質料的個別者である⁽¹⁷⁾。これに対して、肉体的器官の作用ではないにしても肉体の形相である精神の能力に外ならないわれわれの理性にとって、その認識の固有の機能は、物的事物に個別的に実存する形相を、個別的質料に於てあるものとしてではなく認識することなのである。而もこのような認識は、感覚的表象によって表象せられるところの質料的事物から、それが内含する普遍的要素である形相を非質料的に抽象することによってのみ達成せられることは既に考察した通りである。

實在に則してわれわれの認識の本来の対象を探究すれば、それは個別的事物の本性であり、認識の機能に則して考察すれば、非質料化せられた普遍者としての形相以外のものではあり得ないと云う、感覚と理性との二重の性格によって形成せられる人間的認識は、かくて常に不完全から完全への道を前進する。即ち、われわれの理性は、可知的形相を抽象することによって、質料的事物の本質を普遍的且つ直接に認識したのちに、個別的事物に於て存在するかかる普遍的本性を現実的に把握するために、再び感覚的表象に還元しなければならないのである⁽¹⁸⁾。検証による認識が、判断的構成物である複合的存在概念と実在的事物との対応に於ける近似性 *assimilatio* によって、より有効なる認識へと進展せしめられるものである限り、人間理性は、自らの認識の客観性を検証しつつ、全く可能態に於てあるその最初の状態から、対象のより完成せられた定義的把握へと進むのである。人間認識が経験的であり (*cognitio experimentalis*) 推論的である (*cognitio discursiva*) 所以はまさにこのことに外ならないのである。

かくて、注意せられねばならないことは、対象を現実的に認識すると云っても、それが決して個別者そのものの認識とはならないことである。わ

われわれは如何にしても、真に学問的な判断を個別者そのものに対して下すことはできない。個別者としての個別者の何であるかを的確に決定する原理は個別的質料であるのに反して、学問的認識は常に抽象による普遍的原理を要求するからである。即ち、「知性は可知的形相によって直接に普遍者⁽¹⁹⁾を認識し、感覺的表象によって表象された個別者を間接的に認識する」のである。

然しながら、上述の三つの点、即ち可感的、可知的形相が *id quo* であること、普遍者が二つの異なった実存の仕方をもつこと、及び検証が感覺的表象への還元⁽¹⁹⁾に於てなされねばならないと云うことによって、トマスが理性的認識に於て如何に個別者を重視したかは、ほぼ明らかとなったかと思われる。にも拘らず、われわれは、非質料的、普遍的、且つ必然的な理性の認識を通して、内含的 *implicite* 且つ非判明的 *indistincte* に個別者を認識する以外にないであろうが、この事は、個別者の認識が実は理性的認識以外のものにゆだねらるべきことを暗示しているかのようである。

註

- (1) *Nihil autem reducitur de potentia in actu, nisi per aliquod ens actu. Oportebat igitur ponere aliquam virtutem ex parte intellectus, quae faceret intelligibilia in actu, per abstractionem specierum a conditionibus materialibus.* (Thomas Aquinas : *Summa Theologica*, I, Q.79, a.3, Resp.)
- (2) *Formae autem in materia existentes non sunt intelligibiles actu : sequebatur quod naturae seu formae rerum sensibilibus, quas intelligimus, non essent intelligibiles actu.* (ibid.)
- (3) *Et ideo dicendum est quod species intelligibilis se habet ad intellectum ut quo intelligit intellectus.* (Sum. Theol, I, Q.85, a.2, Resp.)
- (4) *Sed quia intellectus supra seipsum reflectitur, secundum eandem reflexionem intelligit et suum intelligere, et speciem qua intelligit. Et sic species intellectiva secundario est id quod intelligitur. Sed id quod intelligitur primo, est res cujus species intelligibilis est similitudo.* (ibid.)
- (5) *Et per hunc modum, sensus recipit formam sine materia, quia alterius modi esse habet forma in sensu, et in re sensibili. Nam in re sensibili habet esse naturale, in sensu autem habet esse intentionale et spirituale.* (Thomas Aquinas :

Commentarium in Aristotelis librum de anima, L. II, 1.24, 553)

- (6) Et per hunc etiam modum forma sensibilis alio modo est in re quae est extra animam, et alio modo in sensu, qui suscipit formas sensibilibus absque materia. (Sum. Theol., I, Q.84, a.1, Resp.)
- (7), (8) Sic igitur patet, quod naturae communi non potest attribui intentis universalitatis nisi secundum esse quod habet in intellectu : sic enim solum est unum de multis, prout intelligitur praeter principia, quibus unum in multa dividitur : unde relinquitur, quod universalia, secundum quod sunt universalia, non sunt nisi in anima. Ipsae autem naturae, quibus accidit intentio universalitatis, sunt in rebus. (Com. in Aristotelis librum de anima, L. II, 1.12, 380)
- Ipsa igitur natura cui accidit vel intelligi vel abstrahi, vel intentio universalitatis, non est nisi in singularibus ; sed hoc ipsum quod est intelligi vel abstrahi, vel intentio universalitatis, est in intellectu (Sum. Theol., I, Q.85, a.2, ad 2)
- (9) Sed quia phantasmata non sufficiunt immutare intellectum possibilem, sed oportet quod fiant intelligidilia actu per intellectum agentem : non potest dici quod sensibilis cognitio sit totalis et perfecta causa intellectualis cognitionis, sed magis quodammodo est materia causae. (Sum. Theol., I, q.84, a.6, Resp.)
- (10) Sum. Theol., I, q.86, a.1, Resp.
- (11) cf. (4)
- (12) De veritate, Q. II, a.6.
- (13) Com. in Aristotelis librum de anima, L. III, 1.8, 713.
- (14) Sum. Theol., I, Q.86, a.1, Resp.
- (15) Intellectus autem humani, qui est coniunctus corpori, proprium obiectum est quidditas sive natura in materia corporali existens, (Sum. Theol., I, Q.84, a.7, Resp.)
- (16) Sum. Theol., I, Q.85, a.7, Resp.
- (17) id quod cognoscit sensus materialiter et concrete, quod est cognoscere singulare directe. (Sum. Theol., I, Q.86, a.1, ad 4)
- (18) Et ideo necesse est ad hoc quod intellectus actu intelligat suum obiectum proprium, quod convertat se ad phantasmata, ut speculetur naturam universalem in particulari existentem. (Sum. Theol., I, Q.84, a.7, Resp.) cf. ibid., I, Q.86, a.1.
- (19) Sum. Theol., I, Q.86, a.1, Resp.